

われわれの未来へ（第11回）

小野 晴巳（地球冒険学校準備会顧問）



還暦を迎えた教え子のS君と久し振りに会いました。8月の真夏日でした。S君を小平養護中等部の3年間担任しました。S君は練馬区在住で片麻痺と軽い知的障害がありました。1970年代頃の肢体不自由養護学校は少なく、多摩地区では小平養護学校の1校だけでした。従って通学圏は広く、私が担任した生徒では八王子在住はもとより川越市から通学していた生徒もいました（かなり重度でしたので母親が自家用車往復通学です。いまでは考えられないでしょう）。S君もそのひとりです。練馬区からバス、西武池袋線、西武新宿線と乗り継いで通学していました。その後大泉養護学校が開校したので、S君は高等部卒業は大泉養護学校です。久しぶりだったのでお互い見分けられるか心配でしたが私は分かりました。しかしS君は分かりかねたようです。

S君は世田谷区の生活作業所に40年以上通勤して現在に至っています。あれこれ話しながらレストランに入り食事をしました。メニューで選ぶのにかなり時間をかけていました。料理が運ばれてきて一緒に食べようとして、私はいたらなさを感じ、激しい後悔に襲われました。S君は不自由な片手でやっとスプーンを掴み、口によろよろ運びはじめたのです。どうしてS君の障がいを考えてあげなかったのか、料理何にするとか、どれでもいいよとか事前に諒解をえて決めただけでした。彼が「うん」と素直に返事したので、安易に行動した自分を責めました。大変な苦勞で食事している姿を見て、もっと配慮しなければならなかったと深く反省しました。また、この左片手しか動かなく、かつ手指の動作が不自由な身体でこれまで頑張ってきた彼の姿を想像し、胸が熱くなりました。彼に拍手を送りたい1日でした。

1. 過去から学ぶ難しさーアジア・太平洋戦争、インパール作戦(7)

昨年亡くなった半藤一利氏(91)回顧展を昭和館(地下鉄九段下駅前)で参観しました。

「第1部・学生時代まで」一東京大空襲で九死に一生を得た体験から「絶対はない」と悟ったそうです。絶対正しい、絶対に勝つ、等信用できないと断言しています。「第2部・文芸春秋社員時代」一週刊誌編集長や取締役等歴任し、かつ夏目漱石の孫娘真理子さんと結婚し、夏目漱石関係の著作や代表作となる『日本のいちばん長い日』の創作ノートなどの展示。「第3部・昭和の語り部として」一歴史探偵と自称しつつ、昭和史研究を通して戦前の軍隊の視野の狭さや不合理性、戦争の愚かさや平和の尊さなどを書いたり講演したりして晩年まで活動した展示でした。

その半藤氏はインパール作戦についてこの様に述べています。
(回顧展のパンフレット) ⇒

昭和館特別企画展
歴史探偵
半藤一利展
HANDOU KAZUTOSHI
入場無料
2023年7月15日(土) - 9月3日(日)
会場：3階特別企画展会場 開館時間：10時～17時30分(入館は17時まで)
休館日：月曜日(7月17日は開館、7月18日は休館)
特別協力：株式会社文芸春秋
主催：千代田区、千代田区教育委員会

昭和館
〒102-0074 東京都千代田区九段下1-6-1
TEL: 03-3222-2577 FAX: 03-3222-2575 https://www.showakan.jp/
https://www.youtube.com/showakanmusem https://www.facebook.com/showakanmusem

インパール作戦は、昭和 19 年(1944 年) 3 月ビルマ(現ミャンマー国)戦線において、インド北東部の都市インパールの攻略を目指した作戦で、兵隊 10 万人が動員され死者 3 万人以上を出し、僅か半年 7 月 3 日で中止した作戦です。評価は太平洋戦争中最悪の戦争とされ、無謀な作戦、陸軍の歴戦中最低の作戦とされ、最大の悲劇を生んだとされています。その原因は司令官牟田口康也中将の功名心と仲間意識による軍隊の無責任体制とされています。半藤氏は「不可能を可能と錯覚した。この戦いの悲劇性は極限を示している。それは上層部の将軍たちの功名心と保身と政治的必要に根拠がある。この錯誤と怠慢と夢想とを、戦場の将兵は義務以上の戦いと奮戦によって払わされた作戦である」と述べています。このように上司からの命令や指示により、悪と分かっているにもかかわらず従うしかない組織は現代でも多いです。

ところがこのような歴史評価に対して関口高史氏は次のように反論します。

「軍隊という組織を考察し、さらに、日本の軍隊という当時の現状や意思決定のメカニズムを調査・研究するとインパール作戦は当然の作戦である。失敗という結果から判定や評価するのは誤りである。牟田口司令官は軍人として当然の行動である」と述べています。

歴史の評価は時勢に流されますが、最近はこのように正反対の意見が堂々と出版されています。

「太平洋戦争(大東亜戦争)は正しかった」「自存自衛のため」「侵略ではない」「欧米の陰謀論」などなど。我田引水論がおおい。これでは歴史とはいえません。何が正しく何が悪いのか、冷静な判断のできる国になって欲しいと願っています。

- ・半藤一利『ノモンハンの夏』(文藝春秋、1998)『昭和の名将と愚将』(文春新書、2008)『歴史と戦争』(幻冬舎新書、2018)ほか
- ・関口高史『田口康也とインパール作戦』(光文社新書、2022)

2、現在の息苦しさ—故大江健三郎氏を偲んで

ノーベル文学賞を受賞(1994 年)した大江健三郎の名前はどなたでも知っていると思いますが、大江文学についてはどんな文学か理解している人は、私も含めて少ないと思います。2 回の大江氏の講演会を振り返ってみます。

その 1 つは、大学 4 年のときに大学講堂で聴いた単独公演会です。

わたしの学生時代を含めた 1960 年代は大江氏の活躍は目覚ましく、芥川賞、1960 年(昭和 35 年)安保闘争、問題作品の提供など政治論と文学界のオピニオンでした。当時の若者のあこがれの存在だったともいえるでしょう。講演会の内容はよく覚えていませんが、これだけは今でも記憶に残っています。「朝鮮学校生の、特に女生徒の制服チョゴリを切るなどしている云々」です。いわゆるヘイト、差別行為のことです。現在こそこれだけで理解できますが、当時は何を話しているか分かりませんでした。私はノンポリでしたが、大江氏ははるか昔からこの行為の危険性を感じていて警鐘をならしていたのです。(大江健三郎 Wikipedia より) ⇒

大江氏の近年の憲法を守る姿勢や原爆の関心(広島ノートなど)沖縄への関心(沖縄ノートなど)など、リペラリストとしての活



躍は私にとって憧れでした。エピソードとして忘れられないのは「ノーベル文学賞」は受賞しましたが「文化勲章」は辞退したことです。反骨なのか反体制として生きるためなのか。それゆえ政府関係役職には一切就いていません。また、それゆえかどうかは分かりませんが、出身地の愛媛県からもあまり厚遇されなかったとも伝聞されています。

2つ目は東京芸術劇場(池袋)での講演会です。

大江氏の長男光氏(作曲家)は生まれた時から障がいを持っていました。このことが大江の作品に色濃く投影されています。大江氏の独特の難解文体はこの長男の障がいの影響もあるのではないかと勝手に思っています。光氏は都立青鳥養護学校高等部を卒業しています。大江氏の作品の中にもはっきりと青鳥養護学校のことを書いてあります。読者からこの作品に書いてある内容は事実ですかという問い合わせがあったそうです。当時の青鳥養護学校教頭から直接聞いた話です。私は青鳥養護学校梅が丘分教室(廃校)教頭時代に、光氏を担任した教師や大江氏夫人ゆかりさんと親交のある教師と一緒に勤務していました。

ノーベル文学賞受賞式会場やパーティーで大江氏とともに光氏も参加し注目を集めました。この時も障がい者に対する態度について外国と日本の差を見せつけられました。オープン文化と隠す文化です。今こそ障がいに対する理解はかなり進みましたが、当時の日本は賛否両論でした。さて、日本の障がい者に対する態度は先進国に追いつたのでしょうか。時代を輝かせてくれた先達のひとりとしてもう一度読んでみたいです。

・『ヒロシマ・ノート』(岩波書店 1965年)

・『沖縄ノート』(岩波書店 1970年)

追記 沖縄戦で旧日本軍が住民に集団自決を命じたと書いてあります。これにたいして命じたとされる元連隊長とその遺族が出版差し止めと軍命令は無いと裁判を起こしました。2008年3月27日大阪地裁で判決があり「集団自決は軍、深く関与」として請求棄却し、大江さん側が勝訴しました。

・大江健三郎講演会の内容(1995年11月10日(金)東京芸術劇場)

第1部 演題「表現の力」

第2部 大江光の音楽」

・大江健三郎『ピンチランナー調書』(新潮社 1976年)他著書、エッセイ、評論多数。

3、未来の希望は教育から一教員の現在地(4)

今回は教員志願者の減少について述べてみたいと思います。

ここ数年教員採用倍率が低下していましたが、ここ1,2年とくに目立ちはじめマスコミにも取り上げられて社会問題化されています。私達教育関係者は以前から問題視していましたが、ここに来てやっと顕在化したかという感じです。

具体的な数字を見てみましょう。来年度(2024年度)公立学校教員採用試験の志願者は今年度の志願者より約6100人(4・5%減っています。ただ東京都、さいたま市、川崎市などは少し増えています。これは例外です。埼玉県と神奈川県は減少しているのですから。

志願者が減少すると何が懸念されるか?一番簡単な答えは教員の質の低下です。これは会社でもどこの組織でも、良い人材を集めて発展・成長するために志願者増が望ましい。教員の志願増も同じです。

次に学校現場が混乱します。担任が足りなくて管理職が代行したとか一人で複数クラスを担当

したなどのもとの原因もこれです。

また年度途中で教員が退職や病休等のとき、臨時教員を探すのが極めて難しくなります。従来は志願者の中から選考して補充していたのが出来なくなるからです。今年の9月1日時点で都内の公立小校で約140人不足しています。都教育委員会は「努力しても埋めきれない」といいます。

文科省の22年度の学生の調査では教職に不安を持っている原因は職場環境と勤務実態の悪化をあげた人数が最多でした。その情報は学校関係者、マスコミ、SNS、などから長時間労働などに懸念を抱いていることです。「ブラック職場」のイメージを与えています。

それでも、教員の仕事に魅力を感じている学生が多いことは救いです。「憧れの仕事です」「子供とともに学びたい」「教育実習で楽しく指導できた」「親が教員」「部活の指導をしたい」「憧れの教員の影響です」などと教員志望を述べています。

これらの教員を目指す動機は今も昔もあまり変化はないです。

教員の仕事は本来功名心とか自己顕示欲とか金銭欲とかとは無縁の仕事です。教育活動の結果として他人が評価するのです。ただし、昔からの聖職者論は否定しなければならない。

一般人とおなじ労働者として生活者の権利を確保しつつ教員の責任感を保つことです。

志願者増に向けて、文科省・各教育委員会は対策を取り始めています。試験日を前倒する、必要単位数を少なくする、さらに、教員の働き方改革、待遇改善として残業代支給、正規教員増など議論されています。未来のために早く実現して欲しい。

教育は地味ですが将来の日本を支える大切な基盤であることをもう一度認識してほしいです。教員もその信託にこたえられように日々研鑽し高い倫理性を持つことも大切です。